

青銅器を帶びた ムナカタの弥生人

愛媛大学ミュージアム准教授 吉田 広



皆さん、こんにちは。吉田でございます。愛媛松山からまいりました。邪馬台国に統属されたという30国、恐らく、その女王に属していた国一つから來たと思っております。

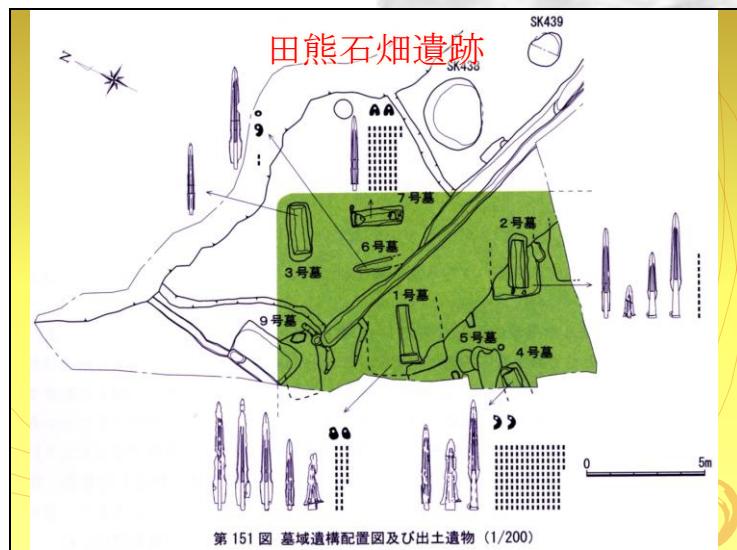
ということで、私の旗幟は、ある程度、最初に鮮明になったかと思いますが、私に与えられた課題は、その前段、このムナカタの地の田熊石畠遺跡で大量に見つかりました青銅器についてです。こういった青銅器を持った人たちがどういう役割を果たしていたのか。そういうことを今日はお話をさせていただきたいと思います。



もう少し、前段の話をさせていただきますと、私は今愛媛に居ながらこういった青銅器の研究をしております。学生時代は京都において、京都から九州にやってきて、いろいろ青銅器を見せてもらいながら、やはり、石川先生と同じようなことを言われていました。「なんで、そんな遠い所において、こっちの青銅器をやるのか」と。でも、青銅器をやっていますと、愛媛の方でも青銅器はありますて、特に銅剣なんていうのは、実は東の方が多い。邪馬台国の前段、弥生時代の中期後半ぐらいには、九州では銅剣は、もうほとんどなくなっていくのですけれども、瀬戸内で増えてまいります。後で出てきますけれども、私が調査しています文京遺跡は、恐らく平形銅剣を作り出して、奉じて、一つの国のまとまりを作り上げたような地域社会の中心だったんだろうと思います。

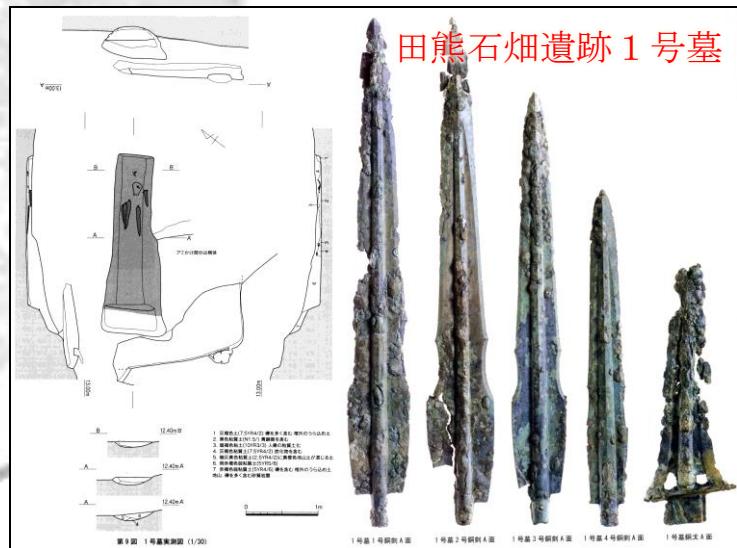
最初に入ってきたところではないんだけれども、九州から、技術だけでなく恐らく工人も移動ってきて、独自の青銅器を作り上げた周辺地域、そこから青銅器文化を見ていると、いろいろな形で見えてくることがある、そういう思いで、ずっと研究をしてまいりました。今日の大きな視点として、ムナカタを考えるとき、私がおります東の方の地域というのを、しっかり見ていかなければならないのではないかと思います。

それでは、白木さんの報告にもあったのですけれども、あらためて田熊の武器形青銅器を見ていいきたいと思います。

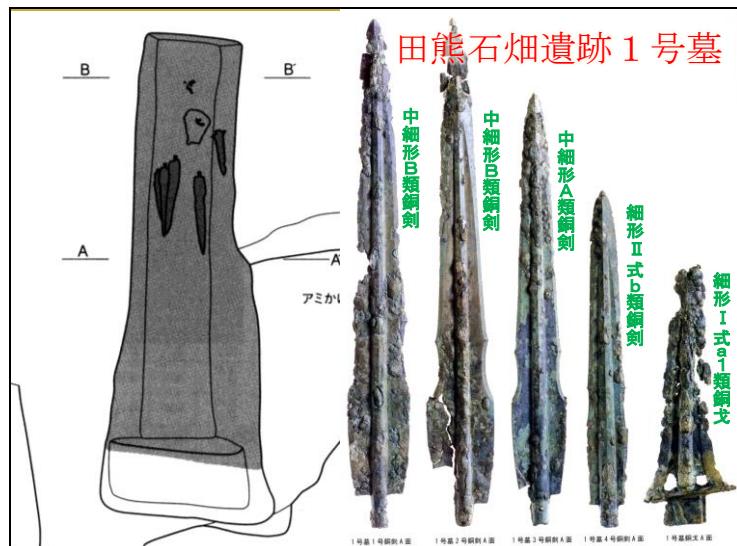


第151図 墓域遺構配置図及び出土遺物 (1/200)

石川先生も使わっていましたが、区画墓の中に青銅器をたくさん保有した墳墓が集まっている。これが田熊石畠の大きな特徴ですし、15本という数は、恐らく北部九州においても最大規模、吉武高木や吉武大石をまとめた、吉武遺跡群の武器形青銅器にも引けを取らない数です。お墓は、さらに西の方にも広がっていますから、20本を超えるような青銅器を保有した可能性も十分あろうかと思います。個々の出方というものを確認していきたいと思います。

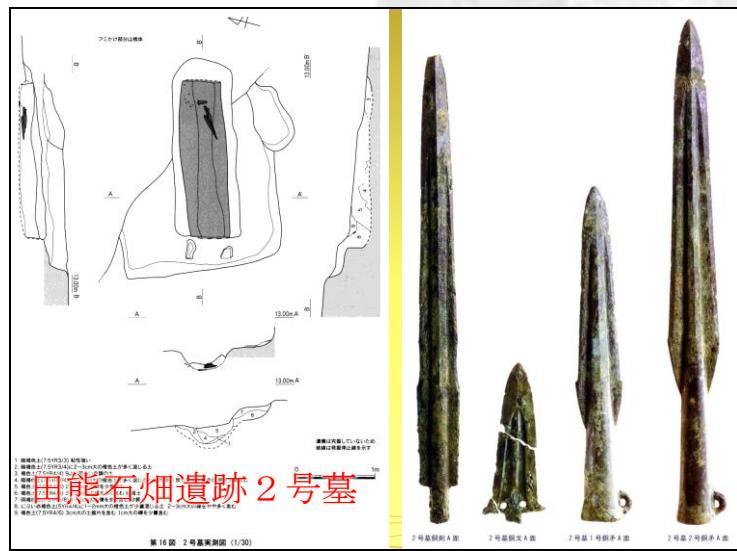


まず1号墓からですけれども、5本青銅器が出ております。



少しアップにして、どういう出方をしているか見ていきましょう。なお、私たちは、細かく
どういう形態かということで時期を確定していくので、型式名を書いています。

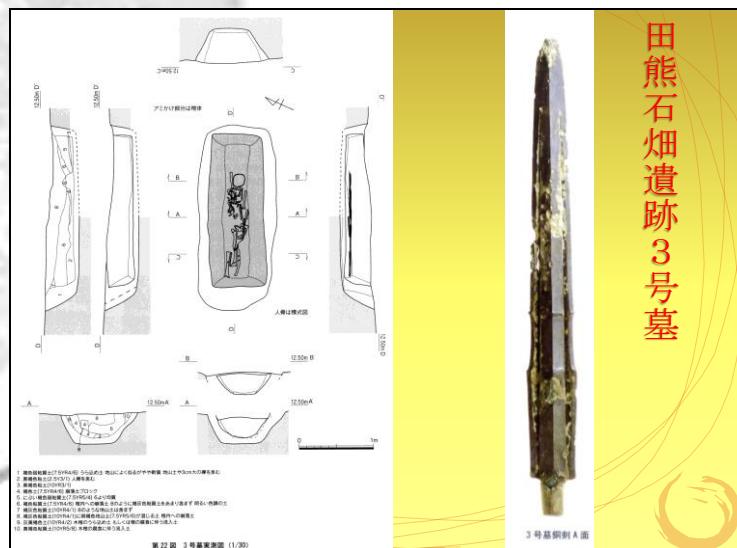
まず、細形銅劍という、古い段階の、こういう小型のもの。それが少し長くなり、中くらい
に大きくなりだしたということで、中細形という言い方をしていて、その中でも、長さに差
があるうち、A類とB類がここにはあります、というのが大きな特徴になっています。そし
て、銅戈がありますよと。遺体に副えられたとき、どういう配置をしているか、後ほど詳
しく比較していきますが、ここでは、恐らくこの辺りが頭部で、両脇に銅劍が下に切っ先を向
け、銅戈も下に切っ先を向けて、副葬されています。



2号墓です。



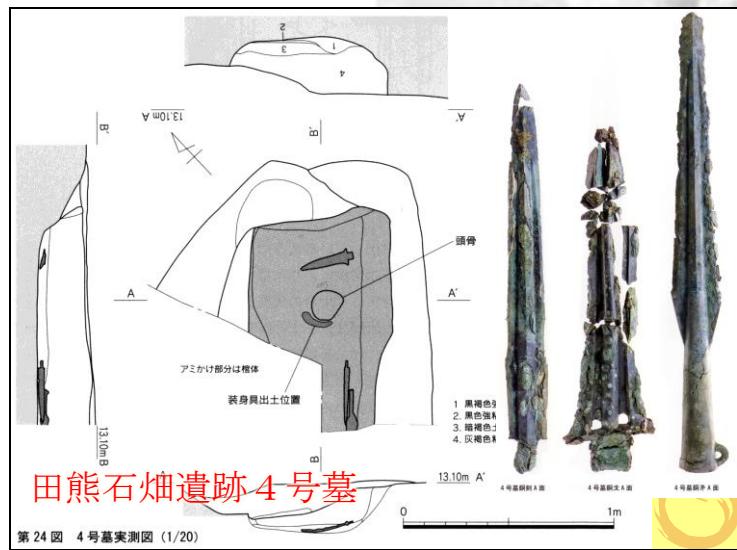
アップにすると、ここでも銅剣があり、それに、銅戈と銅矛です。細形銅剣1本、細形銅戈1本、細形銅矛の2本の組み合わせです。副葬状況はというと、銅剣と銅矛がこう、やはり脇に副えられて、足元に先端を恐らく向けています。対して、横方向に銅戈があります。この銅戈、非常に小型の珍しい銅戈で、型式は細形に収まるのですけれども、これだけ小型のものというのは、私も初めて見たようなものです。



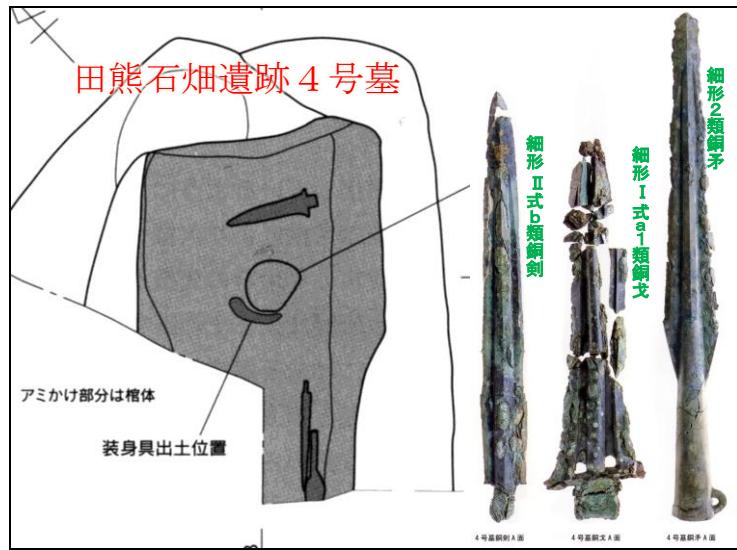
3号墓です。



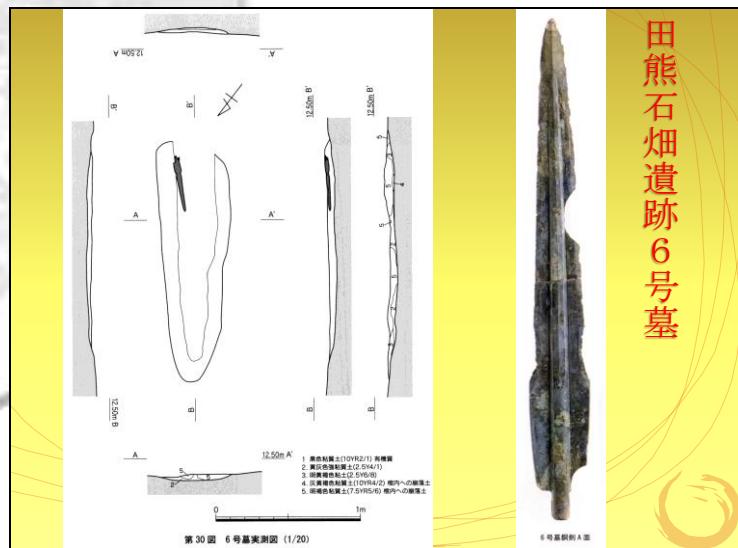
細形銅剣1本ですけれども、銅剣はこの位置になるのですかね。少し人骨の位置が動いているので、再葬ということでしたか。それでも、身の脇のほうに、やはり先端を下向きに置いているという副葬状況です。



4号墓になります。



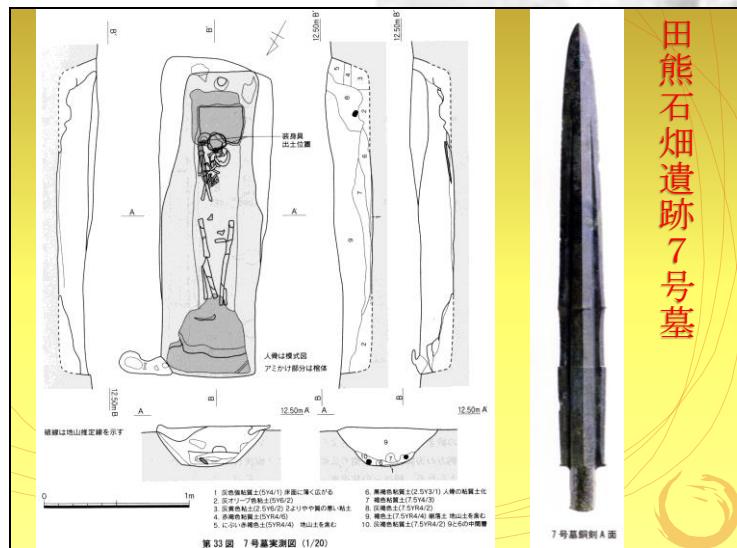
アップにしてみましたけれども、やはり銅剣、銅戈、銅矛と並んでいます。いずれも細形ですが、ここでもこの形が見えるように装身具がありますから、頭がこの位置になります。すると、頭の上に銅戈があって、切っ先を下に向けて銅剣と銅矛があるというような形になっています。



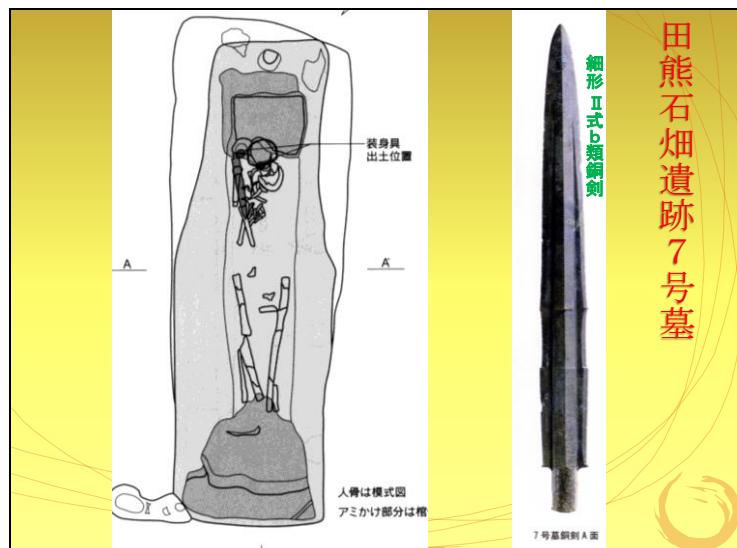
6号墓になりますけれども、これも銅剣です。



非常にシンプルですけれども、こっちの間口が広いので、頭がこちらになるのだろうと思います。そうすると、やはり下向き足元に切っ先を向けて、身の脇に剣を副えているという形になります。



7号墓ですね。



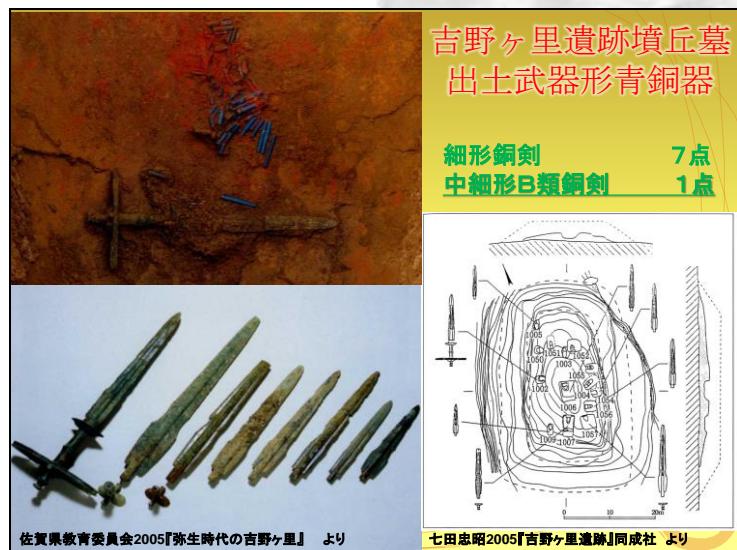
これも少し人骨が動いていたかと思いますが、それでも装身具の位置から、少し頭に近い位置になっていますけれども、銅剣が身の脇で、切っ先を下に向いているという形になります。



一通りこう見てきてまとめてみると、こういう組み合わせになっています。細形銅剣と銅矛、銅戈、いずれも細形なのですけれども、中細形という、あまり朝鮮半島には見られない、大きくなつた銅剣が、この墓群には含まれていますよ、ということが非常に特徴的です。中でも、中細形B類銅剣。これは、昔は瀬戸内地域にしかないとと言われていたのですけれども、吉野ヶ里遺跡や柚比本村遺跡の調査で甕棺から出てきて、九州にもあったということが分かってきました。ここ20年くらいの成果ですが、そういうものが田熊石畠にも含まれてくるというわけです。甕棺ではないので、田熊石畠の時期をなかなか決めきれないですが、こういう組み合わせ、中細形B類銅剣を持っているお墓というのは、吉野ヶ里や柚比本村を参考にすると、やはり中期前半の武器形青銅器の組み合わせということで考えて良いだらうと思います。

そして、銅剣というのは基本的に、身の脇に、下向きに副葬されていた。でも銅戈だけは違ったなというのが、何となく分かっていただけなのではないかと思います。その辺りは少し後段でお話させていただこうかと思います。

さて、このような田熊石畠は、中期の前半くらいに、15本もの青銅器を持つに至ったお墓だということになるわけです。残念ながら、これが最古ではなく、それに続いて、そういうつたお墓が広がっていく段階のものということです。同様の時期の資料として、吉野ヶ里とか柚比本村について、見てみたいと思います。



有名な吉野ヶ里ですね。後ほど、高島先生からいろいろお話があると思います。吉野ヶ里で出てきている、有名な有柄銅剣、柄も青銅で、一鋸で作った銅剣です。一見長いのですけれども、銅剣自体は大きくありません。銅剣自体が大きくなつたものが、墳丘墓の中から1本出でております。汲田式を中心とした甕棺に伴つて、細形銅劍7点と中細形B類銅劍1点が出でているわけです。

じやきへい示像
みやこくふく2014



柚比本村遺跡でも同じように、ここでは中細形B類銅剣が4点も出でております。むしろ、こちらのほうが多いのです。細形銅剣は3点。銅矛も上半のみが1点出でております。特に有名なのは、玉の素材を漆で埋め込んで、それを研ぎ出して飾りにした鞘に納めた状態で甕棺に副葬されたもので、これは細形銅剣でした。

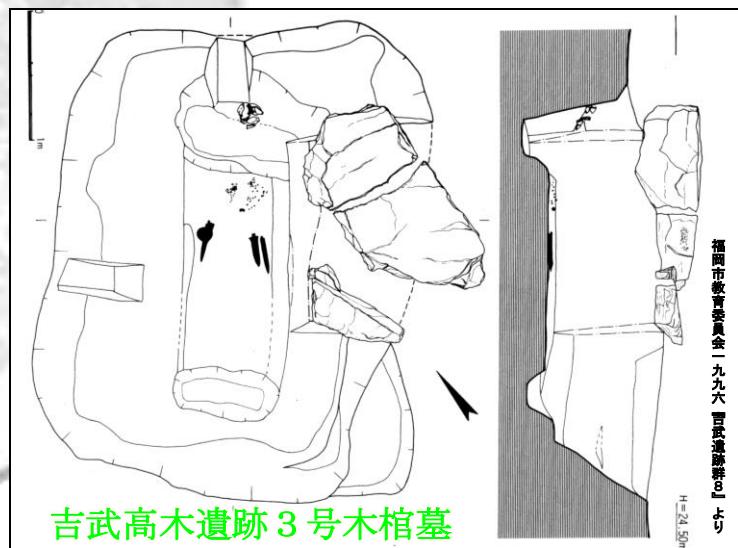
こういった中細形B類を含んだ吉野ヶ里や柚比本村は中期前半ですから、田熊の青銅器もほぼ同時期とみてよかろうと思います。



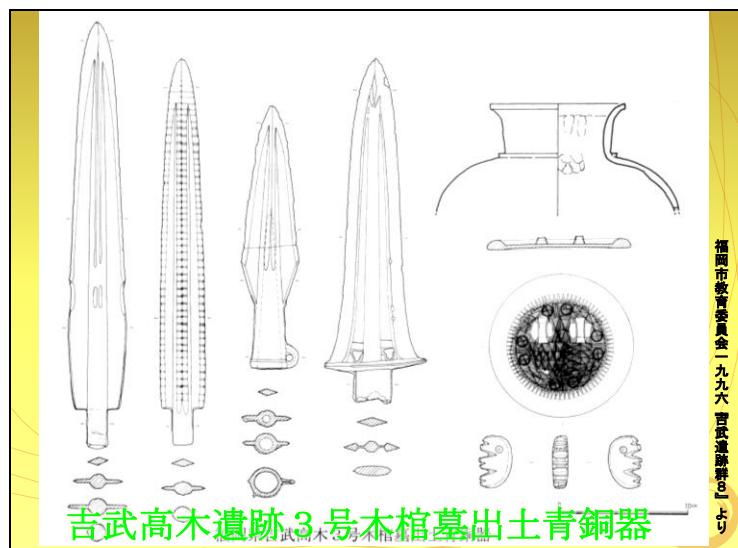
よく、前期末・中期初頭という言い方をするのですけれども、1度まとめる機会があり、九州で前期末にさかのぼるという金海式の甕棺は、中期初頭に位置付けたほうがいいだろうということで、こういった青銅器を副葬するお墓が現れてくるのは中期初頭。最近の年代観では、紀元前の3世紀あるいは4世紀に上がってもいいのかなと、思っております。そういう時期から、青銅器の副葬が始まっています。その最初にまとまって出てくるのが、有名な、福岡市早良区の吉武の墳墓群になります。



とりわけ著名な、私なんかもよく使わせてもらっているのが、「吉武高木3号木棺墓」というものになります。ここでもやはり、複数本が集中するということで、写真には1点しか出でていませんけれども、銅剣が2点あります。そして、銅戈、銅矛というセットが、木棺の中に副葬されている状況になります。



図面でこうありました。小口に板を打ち込んで、その中に木棺を組んでいます。ここに頭飾りがありますから、やはり被葬者の両脇に武器が副えられ、鏡も持っています。武器は、やはり全部、下に切っ先が向いています。その中に銅戈もあります。先ほどと少し違いが見えてきていますよね。



このセット。こういう銅剣の、銅矛、銅戈のセットであります。



ほかに吉武では大石遺跡でも、同じような、中期の初めにさかのぼるような青銅器、ちょっと田熊より古いものが集まっています。



そして、もう1つ古いものとして挙げられるのが、有名な板付遺跡の環濠がありますけれども、これが調査されるより昔に、中山平次郎先生によって、古い武器形青銅器のセット、そして甕棺の破片なんかが拾われて、武器形青銅器を副葬するお墓が存在したようです。後に復元され、この南東の隅一角に、どうも墳丘墓があつたらしい。吉武なんかと変わらないセットを持っているのではないかなどと言えるかと思います。

こういったものが、田熊より少しさかのぼって、古い青銅器の副葬を持っている墳墓という形になります。



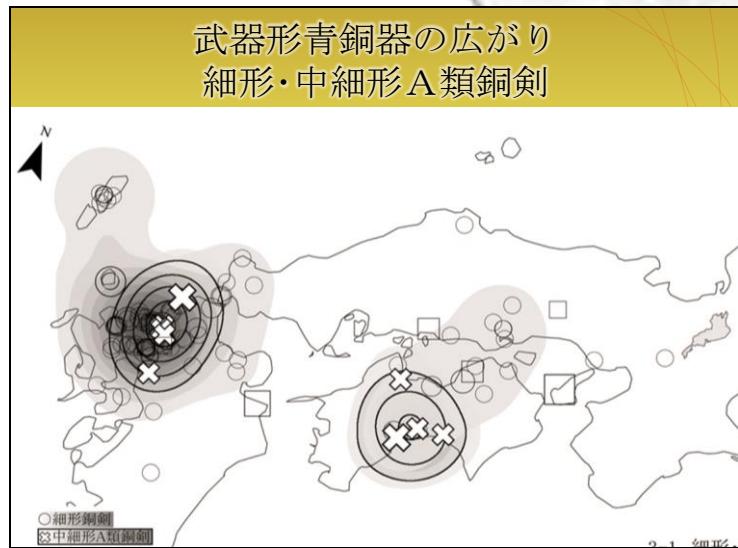
それをドットに落としてみたのが、次になります。

遺跡名のキャプションが細くなって分かりにくいのですけれども、この緑が中期の初め、前葉でも早い段階にさかのぼる、青銅器を副葬している墳墓群かなと言えるところになります。先ほどの板付田端、そして吉武高木、吉武大石、周りには他に有田とかがあります。で、最近、この早良の一番奥で岸田遺跡というような、やはり中期初めにさかのぼるものが出でています。その他は、久米であるとか、釈迦寺、そして、あとで出てきます馬渡・東ヶ浦。そして、これも後で出てきます、小倉城下層のものも、この時期にさかのぼるだらうという形になります。

こう見てみると、中期の古いところの青銅器は、何でここ吉武の早良に集まるんだろうか。奴の中核と伊都の中核の間。かつては早良国が存在したのか。石川先生の中では奴国の領域に含めるんですかね。独立させることは少ないかと思うのですけれども、こういうのを見ていると、最初はここの早良で、中枢がこっち（奴国）に、あるいはこっち（伊都国）に、どうでしょうか、移動したのかなということを、私は考えてしまうのです。それほど早良に、古い段階は、集中するわけです。しかも、一番平野の奥の岸田という所まで、青銅器を持つ墳墓が見つかってきております。

次の赤は、中期の前半、前葉といったものをドットで落としております。ちょっと正確ではないところもあるかも分からぬのですけれども、田熊、朝町竹重のようなものです。先ほどの宇木汲田、久里大牟田、吉野ヶ里、柚比本村。そのほか周辺にいろいろあるというような形です。この時期でも奴国では、汲田式甕棺の細形の青銅器の副葬って少ないですね。須玖でも2、3点くらい。早良では吉武樋渡くらいになります。こういった範囲に広がっていく中で、田熊というのは、東に向いて広がった一大拠点を形成しているというのが分かるかと思います。中期の前半になって、武器形青銅器の副葬が広がっていく。ここが、まず東の拠点だということになりますね。

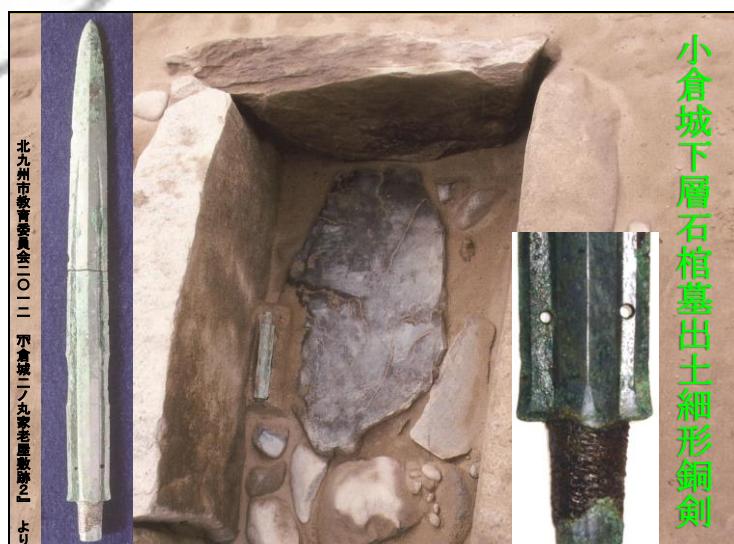
では、ただ単に数だけで、この辺からこちらに広がったのか、独自性はないのかということがなのですが、そうじゃないですよと。いやいや、こちらのほうはまだこちらの独自性がありますと。本当は、私はもっと向こうのほうの、東のほうの独自性を言いたいのですけれども、まずは、今日はここムナカタの独自性の強調をさせていただこうと思います。



この段階、九州が圧倒的に多いのですけれども、私がいます瀬戸内のほうにも、実はぽつぽつと細形銅剣が出てきます。瀬戸内のほうで特徴的なことがあるのですけれども、最近、東への広がりを考える上で注目されるものが、北九州市の調査で出土しました。



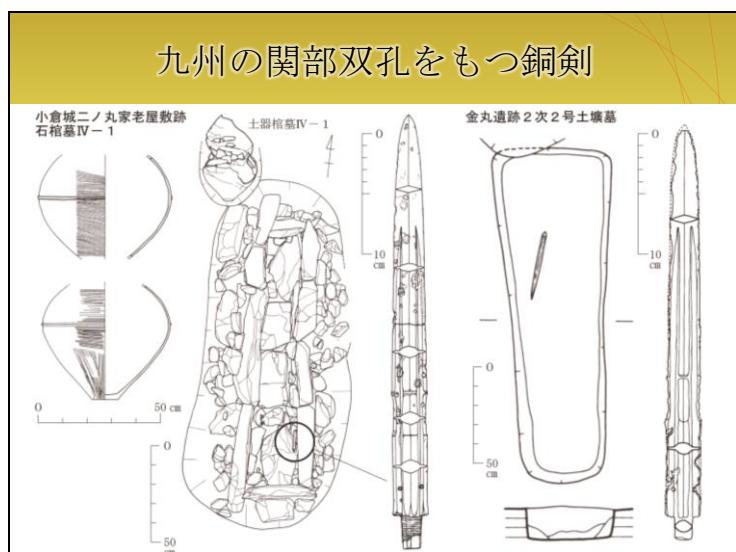
報告書の中でも書かせてもらっているのですけれども、小倉城は浜堤上にあって、その家老屋敷のところを「二ノ丸家老屋敷跡遺跡」として調査しました。お城の時代ではなく、下層の砂丘に営まれた弥生時代の墳墓群の遺跡ですので、「小倉城下層」と言わせていただきます。その中に石棺墓があり、銅剣が出てきました。しかも、この石棺墓は、横の土器棺墓と切り合い関係があつて、時期をかなり絞り込める、非常に貴重なものです。出てきた銅剣がこちらになります。



まず、こう2つに割れていますけれども、副葬のときにパキンと折って、それを2つ重ね合わせて副葬している。恐らく割りやすい、非常にスズ分の高い銅剣だったろうと思います。さらに注目したいのは末端の構造です。柄に付けるため、木の柄に付ける部分に、摩擦でしつかり付くように、紐をここでは巻いておりました。加えて、ここに孔が開いています。実はこの孔、東の瀬戸内地域に出てくる細形銅剣はたくさん開いているのです。むしろ、それが通例と言っていいほどです。



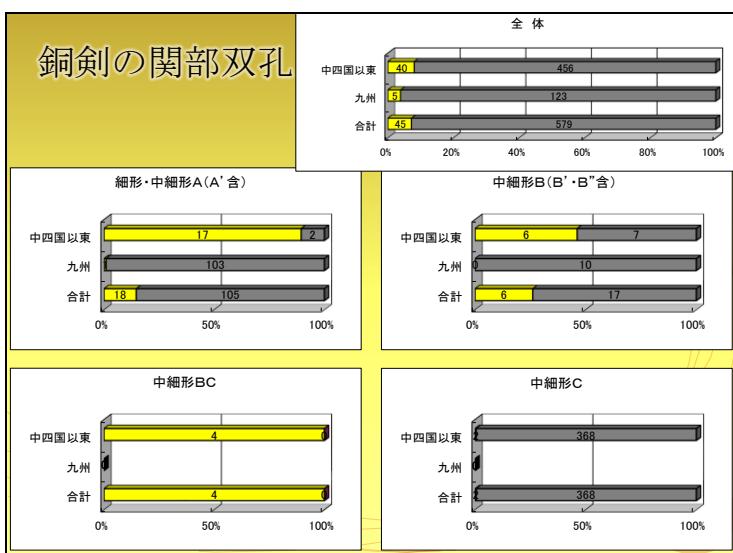
よくよく見返してみると、同じような銅剣が、遠賀川の西側、遠賀町の金丸遺跡でも1点出ておりました。報告書を見ると、こういう形で、恐らく木棺に副葬されているのです。ちょっと壊れてしまって見づらいですけれども、ここにやはり丸い孔が開いています。



図面にしてみると、こういう形です。小倉城下層では石棺墓の中に銅剣が入っている。そして、こういう土器棺に切られている。こういう土器より古いだろうということで、中期のかなり早い段階にさかのぼるということが分かるものです。そして、金丸ではこういう土坑になっていますけれども、四角く作られていますので、恐らく木棺に葬られたものです。こういった所に、こういう孔の開いた銅剣がありますよということになりました。



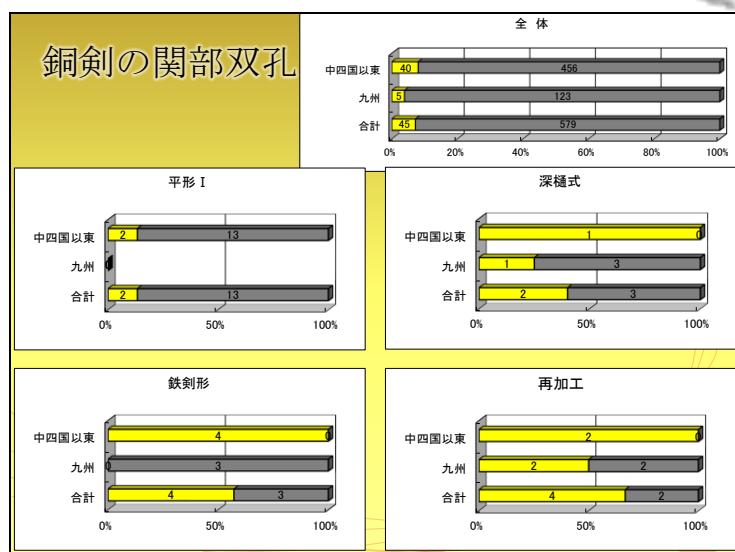
それで、孔の開いた銅剣ですが、この香川県の藤の谷の細形銅剣のように、瀬戸内に来るといふと、というか九州を抜けると、銅剣には孔を開けるようになります。あまねく孔を開ける。この孔がどういう機能を果たしていたのかというのが、長らく議論があったのですけれども、ひとつ回答を私なりにしてみました。



どのくらい銅剣があるかというと、500本以上、600本近くあるのかな。そのうち358本は荒神谷の銅剣です。そのうち、孔が開いているのは、せいぜい40本くらいです。1割に満たず、全体の中では非常に少ない。細形の古いところに限っていふと、中四国以東、要するに九州を出ると、20本あって18本には孔が開いていますよ。片や九州では、このデータを

作った時114本、田熊はまだ入っていない、2本しかない。先ほどの2本だけです。非常に例外的だと。そのあと、新しくなっても、常に、九州以外の所では、孔を開けるということが通例になってくるような状況があります。

中四国地方だけ黄色が目立っていますね。先ほど見た北部九州の2点はこの黄色の部分ですね。古いのと新しいのがありますけれど、型式によっては中四国以東では全て孔が開き、九州で全然ないというものが出てきます。九州を一歩出ると、銅剣にはあそこに孔を開けるとのが通例のようなことになっています。その一番西の端、西限というのが、遠賀町あるいは小倉城下層になっているという形です。



次の新しい段階ですけれども、やはり傾向は変わりません。

それでは、この孔は何に使ったのかということなのですから、グラフを作って、孔の高さの位置をいろいろ分析してみました。こちらが高くなればなるほど、一番末端、私たちは「関」と書いて「まち」と読む、刃の下端の部分になりますけれども、そこからどのくらい高い位置にあるかということを、こここの値との比率を折れ線で、絶対値を棒グラフで表しています。非常に高い位置に孔があるということが分かります。一方で、極端に低い位置にあるものがあります。どうも、2種類ある。で、短い細形でも、やはり高い位置にあって、細形より低い位置にあるものが特徴的です。



こんなふうに低い位置にあるんですね。これは、須玖岡本で中期後半の多機能式銅剣といわれるものですけれども、非常に低い位置にあります。そして、分析された詳細を見てみると、ここまで柄が、木で覆っていた痕跡があります。つまり、この孔というのは、ここまで木の柄が入って、目釘孔に使っていたということが明らかです。つまり、こういう低い位置のものというのは、目釘孔として使ったのだろうということになります。



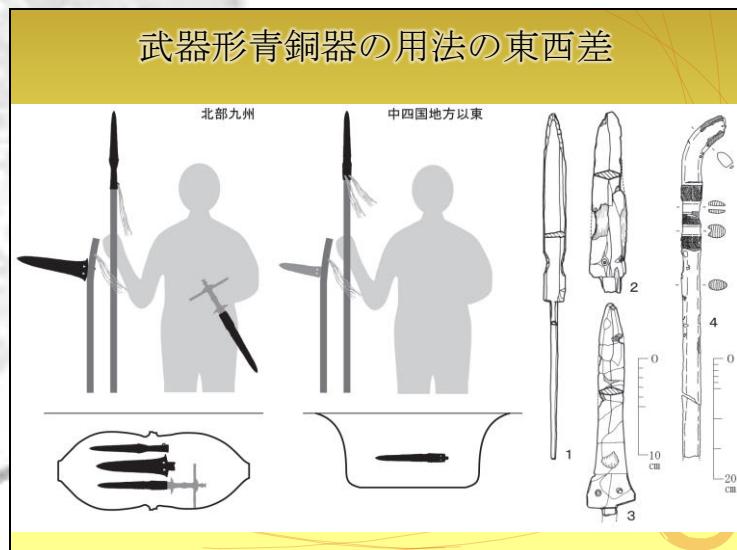
つまり、こういう低い位置にあるもの。こういったものは、目釘孔として使ったものだろう。では、こちらはどうなのか。目釘孔として使うより、どんどん高い位置に上がってきます。ここまで覆うことはあるのですけれども、基本的に銅剣というのは、ここまでしか柄に入れません。古い細形の武器形の銅剣は、ここまでしか柄に入れません。吉野ヶ里の有

柄の銅剣を見てみても、ここから下が柄に納まっています。すると、柄に付けるためには関係ない孔だということが分かります。



それで、どう考えたかというと、低い位置のものは、柄に付けるための孔だと。高い位置というのは、どうもそうではない、柄に付ける以外の用途。装飾の装置ではないのか。布帛なんかのような吹き流しを、そこに付けたのではないかなというふうに、私は考えたところになります。

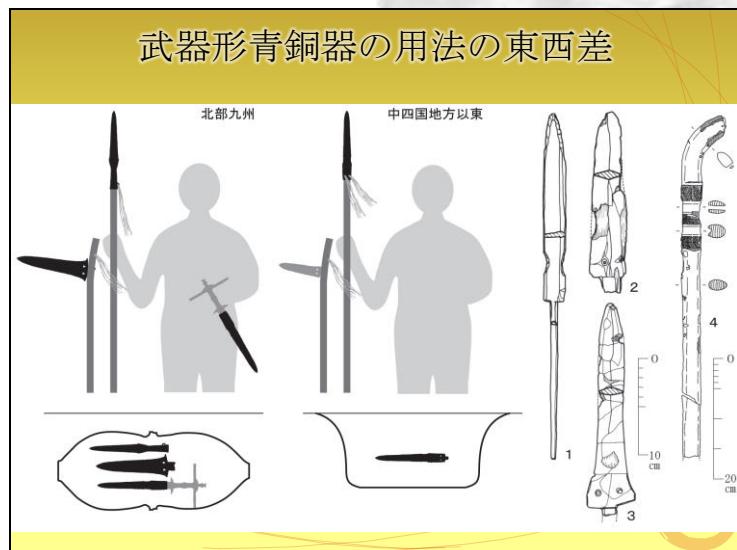
ちょうどそういうふうに、長い柄の先に付けた、木製で真似たものが、山口で出てきています。本来、銅剣というのはここにあるのです。柄に付けています。それを、もっと長い柄の先、ちょうど銅矛のような形で、代わりに銅剣を長い柄の先に付けて、なびかせていく。そういう使い方を、ムナカタより東にいければ、し始めている。九州を東に出てしまうと、もうそういう使い方ばかりになりますよということになります。そういったものが、その後、ずっと大型化してお祭りの道具になっていく、その契機になっているのではないかと考えています。



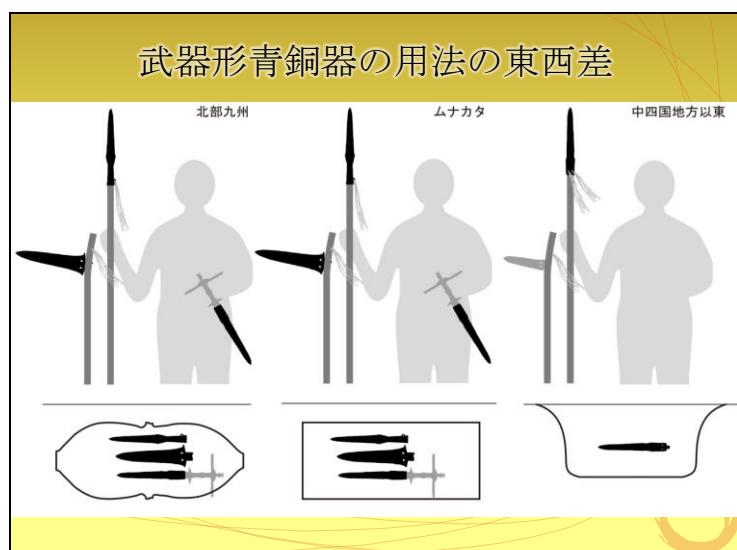
それを模式的に書いたのが、こんな図になります。ちょうど最近書いた論文の中で使っていたものですけれども、次の図のほうがいいかな。



九州では、銅矛を長柄の先に付けて、こう吹き流しを付けるのですが、銅戈も吹き流しを付けますよ。でも、一步東に出ると、銅矛はもう数が少ないので、なかなか中四国の人には分けてもらえません。破片しか来ません。銅剣が、唯一数が多いので来のですけれども、その銅剣を長柄に付けたのではないか。どうも、中四国へ行くと、銅戈もほとんど来ません。代わりに木製の戈を付けたのかなという形になります。



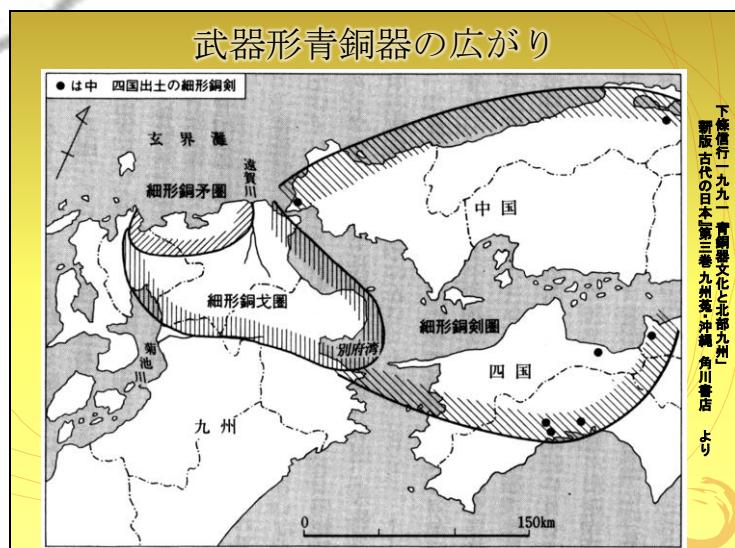
そして、同時に、九州では甕棺の中に副葬品として納めるんですよと。甕棺を示しています。ところが、中四国にいくと埋めてしまう。埋納ということを、この当時からやり始めています。こういうふうに、九州と中四国以東で、扱いに大きな違いがある。その線引きというのが、どうもムナカタと遠賀町、あるいは小倉城下層の辺りにある。少なくとも、ムナカタというのはこっちの範疇に入ってくるのだろうということが、一つ分かります。



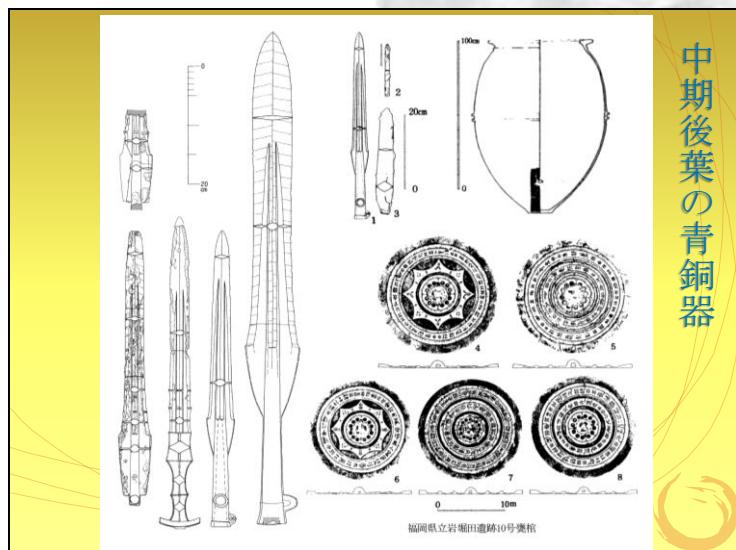
ただ、ムナカタの場合は甕棺ではなくて、四角い木棺になりますよ。使い方は同じなんだけれども、やはり埋葬のし方が違いますよ。甕棺ではなくて、木棺を採用していることが、やはり1つ大きな特徴だろうかと思います。論文を書いてから、今日発表するまでに、急き

よ、この間に1つ入れ直しました。こういう、より東との違いの間に、ムナカタのものが1つ入ってきます。これが、ここまで一つの結論になります。

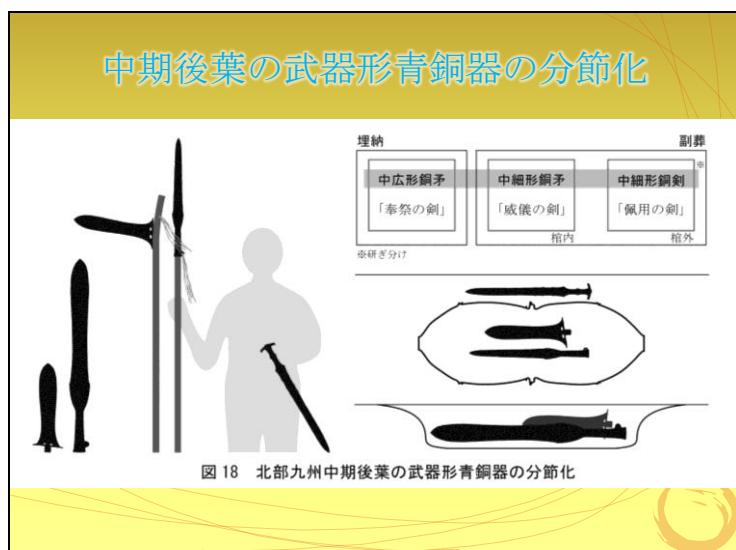
では、それだけなのかというと、実は、まだ本当の、私の結論ではありません。これからまた変わります。



九州のここにしか細形銅矛はなくて、銅戈はもう少し広がる。で、銅劍がさらに広がる。やはりいいものは自分の所だけで取る。たくさんあって、外部へも供給できるものは、その分価値が低い。稀少なものは自分の所で抱え込んでいる。銅矛をトップに扱う世界というのは、この玄界灘沿岸、響灘沿岸も含めた、この北部九州の沿岸地域で形成されるのだと。そういうことを強くおっしゃっております。そういった中で、銅矛中心の世界というのがこのムナカタにもあったのかというと、どうもそうではないのではないかというのを、この田熊の調査を見ていると考えさせられます。

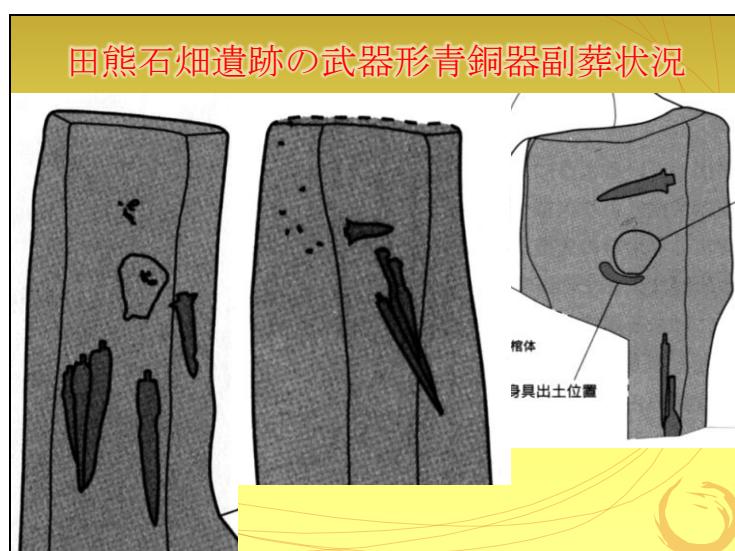


特に銅矛中心になってくる中期の後半くらいになると、これは立岩堀田の甕棺に伴つてくるものでしけれども、やはり、王様のお墓の中に入つてくるのは、中細形の銅矛です。この前漢鏡とともに王様の墓といわれている中に副葬される、死者に副えるのは、この銅矛です。銅剣も一緒に副葬されることがあるのですけれども、例えば、こちらの真ん中の銅剣は、三雲南小路のものです。これは甕棺の外に副葬されています。代わって、銅矛、銅剣の中に研ぎ分けを施すようなものがあつて、こういう中広形の銅矛は、中期の末にはさかのぼつて登場してきているんだろうと思っています。銅矛を副葬あるいは埋納するような、特に美しく研ぎ分けられた銅矛を中心とした世界というのが、北部九州の中枢といわれる地域では、中期の後半にはできあがつてゐる。対して、そういうものとは違う世界が、東側には展開したのではないかと思います。



それを模式的に表したのが、こちらの図になります。九州の奴国や伊都国では、やはり銅矛を掲げる、銅戈を掲げる。そして、やはり長い剣を腰に帯びる。でも、副葬されるときは、戈も中に入ることはあるのですけれども、やはり矛で、剣なんかは外に置かれる。同時に、中広形の銅矛も持っているのでしょうか、同じ研ぎ分けを共有していますので。副葬用のもの、埋納用のものというものが使い分けられるシステム、私は「分節化」というような言い方をしていますけれども、いろいろな青銅器を使い分けているわけです。うらやましいですね。瀬戸内から見ていると、九州はいろいろな青銅器があります。最後に石川先生もおっしゃっていましたように、大陸の門戸ですから、いろいろなものを入手できているのです。で、独自に作り変えている。中国・四国のはうへは、一品ぐらいしか来ません。九州では、いろいろなものを使い分けるシステムというのが非常に体系化されてくる。それが中期の終わりごろ、奴国、伊都国というものが大きくなってくるときに、そういうシステムを作っていくのだろうと思われます。

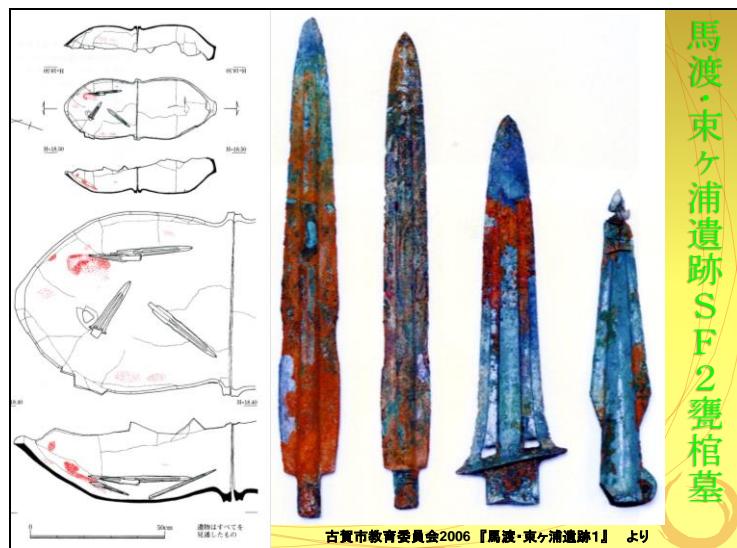
そういうシステムとはちょっと別の考え方、そのシステムの前に、どうもこのムナカタの地域にあったのではないかと思うのが、これからのお話になります。



先ほど、細かく見てきました田熊の青銅器の副葬状況になります。銅剣と銅矛は、全て切っ先を下に向けています。その中で、銅戈だけがこういう位置にあります。銅戈というのは、柄に直角方向に付けるので、こういうふうに柄が本来付くんですね。柄を外したかどうか、いろいろ議論があるのですけれども、基本的に長柄が入っても、こちらの2点は納まるような形になります。で、やはり頭部に一番近い位置、これなどは頭の上にこの銅戈が置かれております。で、こちらは、銅矛と同じように下を向いていますけれども、一群を離れて、より頭の近い位置に、銅戈が下向きですけれども置かれています。恐らくこの場合は、柄が外されていたのではないかと思われますけれども、やはり被葬者の大事な所の一番近くに銅戈が置かれるというような選択が、田熊の中では見ることができます。

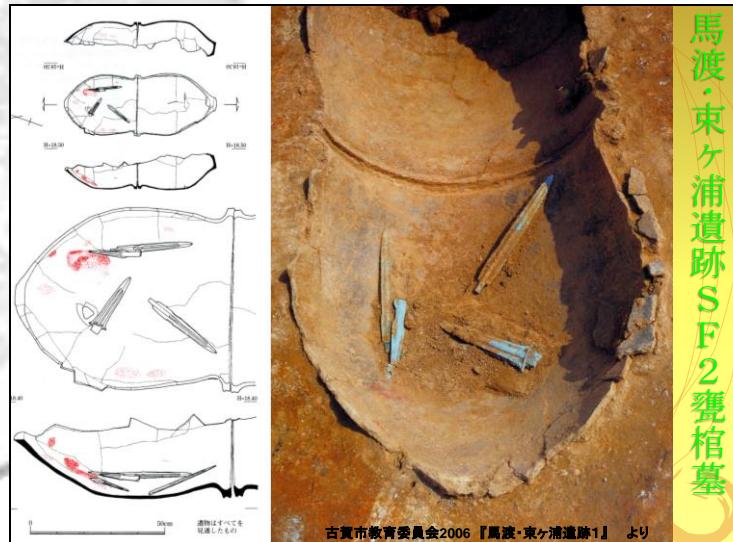


そういう形で少し見していくと、これは朝町竹重です。やはり、銅矛の破片もあるのですけれども、頭部に近い位置に銅戈が置かれています。



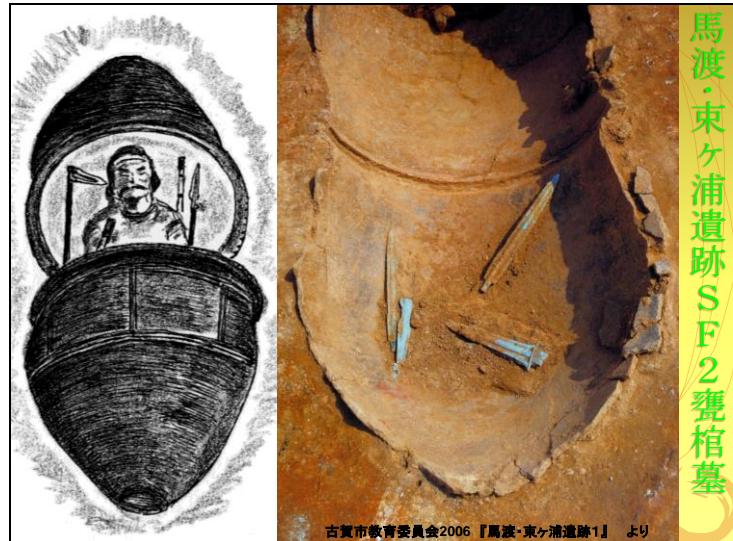
そして、馬渡・東ヶ浦、地元の名称をうまく言えませんけれども、これは甕棺の中ではばらばらになっていて図面ではなかなか読み取りにくいのですけれども、報告書の記載を読みますと、赤色顔料もここにある程度まとまって、頭部に一番近接した位置にやはり銅戈があるということです。

馬渡・東ヶ浦遺跡 SF2 甕棺墓

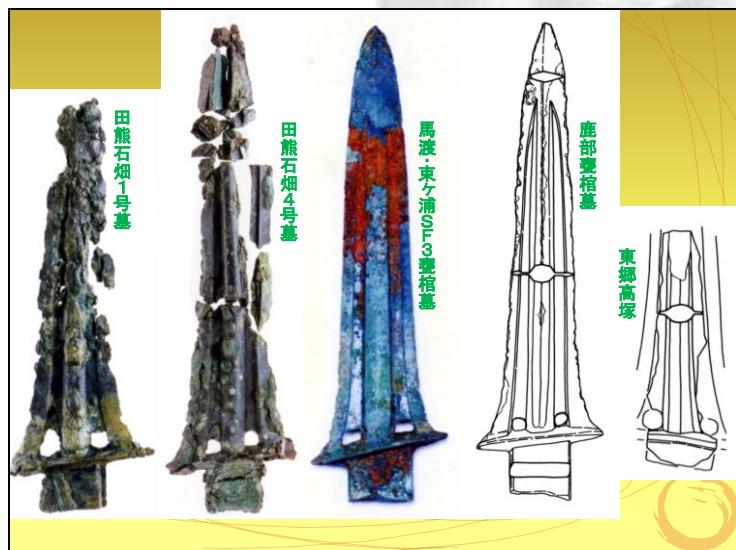


写真ではこちらです。ばらばらと散ったようですが、頭部に一番近い真ん中に銅戈が置かれています。

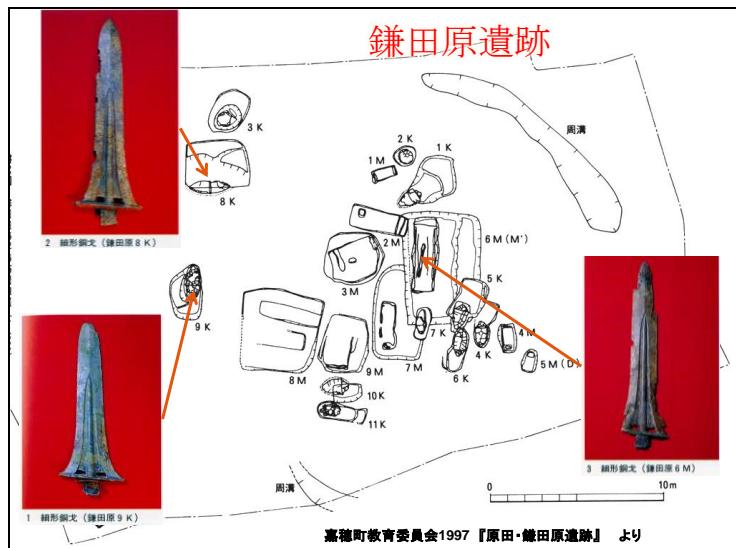
馬渡・東ヶ浦遺跡 SF2 甕棺墓



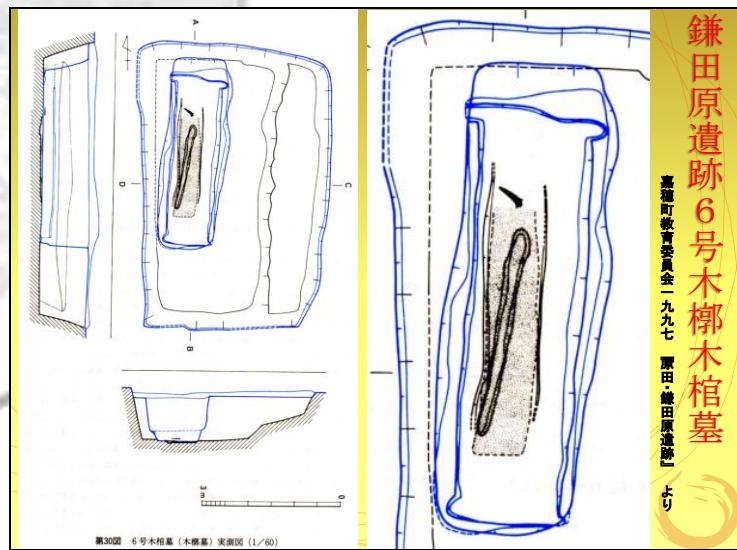
報告書では、こういうイラストが描かれていました。銅矛は上向きですね。銅剣が下向きになっていて、銅戈が頭に近くに位置しています。ムナカタのもう少し西、古賀地域で、銅戈が頭に近い位置に副えられるということがありそうです。



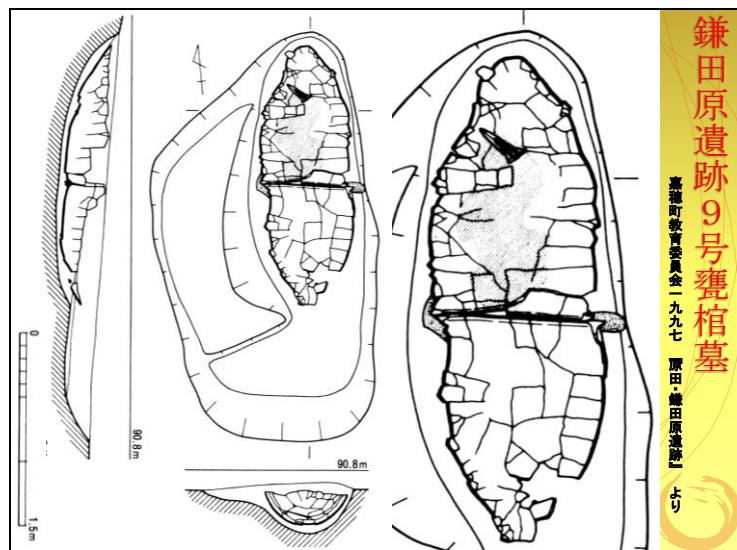
この馬渡・東ヶ浦の銅戈ですけれども、田熊の1号銅戈、4号銅戈と、実は非常に形態的に似ています。同一型式に分類できるでしょうか。同じものは、鹿部の皇后峰の甕棺から出たものも、そして、恐らく、東郷高塚のものも同じ型式になるかと思います。他の地域にもあるのですけれども、古賀からムナカタの地域にまとまり、ここではこの銅戈が卓越する、強い志向でこういった銅戈を選択しているということが窺えます。しかも、頭の近くにそれを副葬するのです。



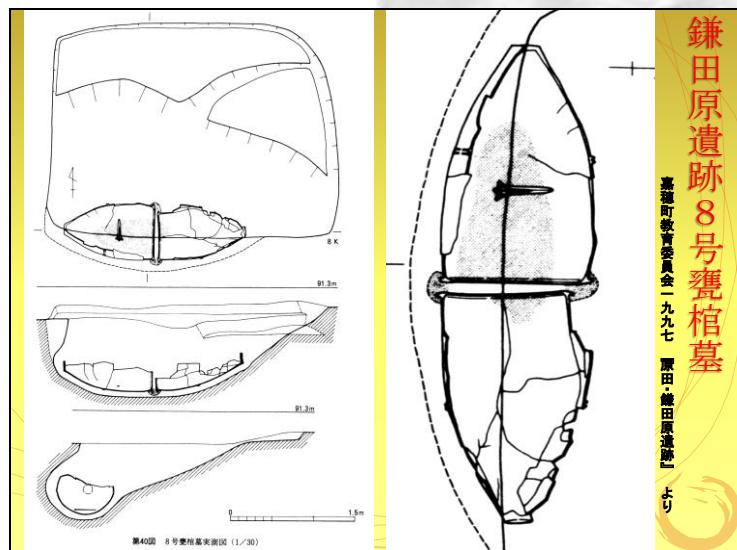
その伝統は、少し時期は下って、嘉穂の奥のほうで見ることができます。旧嘉穂町、今はどこになるのですかね、鎌田原遺跡です。ここも区画墓になるのですけれども、副葬されているものは、いずれも銅戈になります。



こちらは「6号木槨木棺墓」といわれる、二重の棺桶になるものです。やはり同じように、銅戈を頭部の位置に、横方向に向けて置いています。



甕棺に副葬されている場合も、同じように頭部の所に、銅戈が見てとれます。

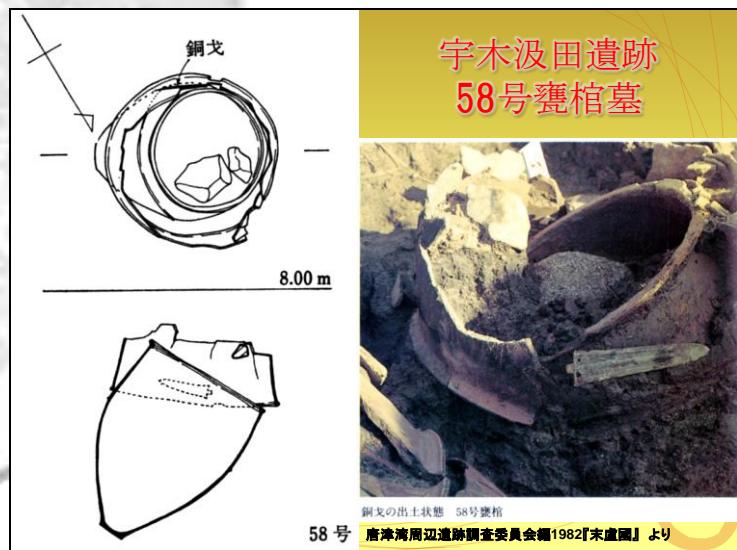


こちらの窓棺でも同じように、頭部に当たる朱の濃い部分の高い方に銅戈が位置しております。

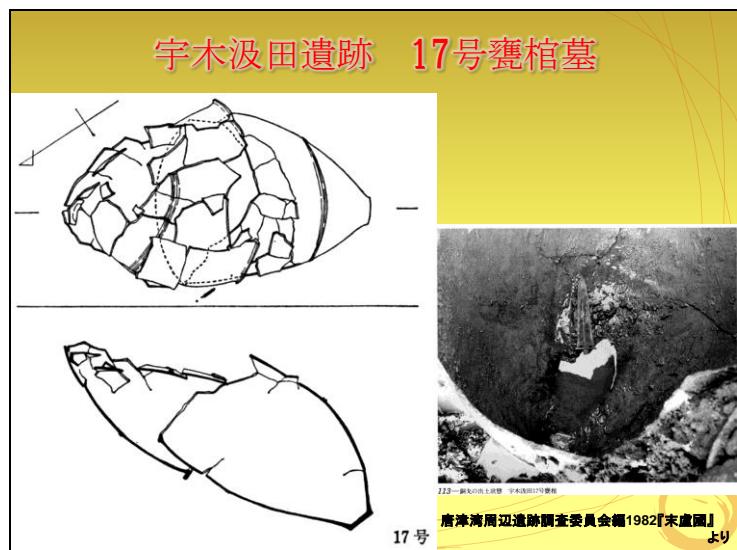
こういう、合う例ばかり挙げてきたので、では、西の地域はどうかということで、少しそちらの地域の銅戈の副葬状況を見てみます。



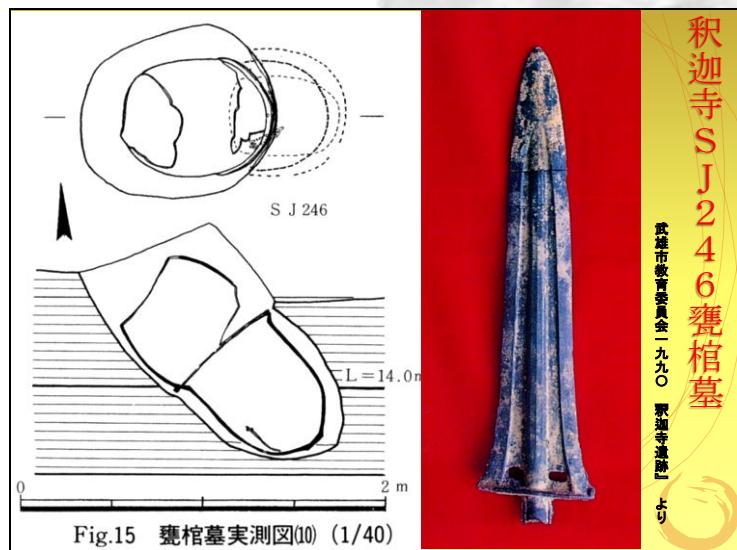
先ほどの吉武高木3号木棺墓ですけれども、銅戈は、銅剣、銅矛と一列になっていて、明らかに柄から外されています。



今回いろいろ集めていて面白かったのは、この写真です。『末盧国』という報告書の中でカラー写真があり、銅戈の扱いが非常によく分かる例です。甕棺の上甕と下甕を合わせた、その合わせ目の中に、銅戈が入っておりました。宇木汲田の58号甕棺です。厳密な意味での棺内副葬でなく、かといって棺の外でもない、中間のような位置に、銅戈が副葬されている事例になります。少なくとも、頭部付近、被葬者に近い位置ではないですね。

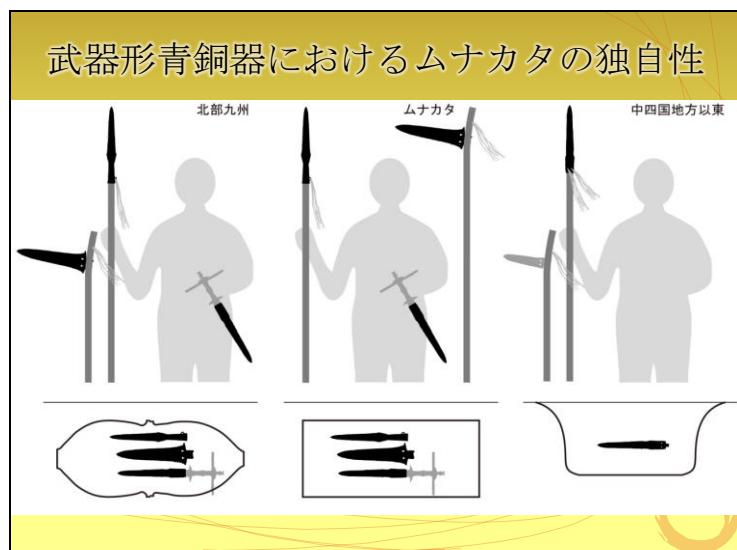


こちらは、宇木汲田の17号甕棺ですけれども、これは下の甕のほうに落ち込んでいる形で出土しております。



こちらは、武雄の釈迦寺ですけれども、これもやはり下に落ち込んだ位置になります。中期の古い段階の甕棺形態で、細形銅戈を副葬しています。かなり斜めになっていますので、ずり落ちたとも言えなくもないのですけれども、明らかに珍重されて頭のすぐ横に置かれたということを、積極的に言える形ではありません。

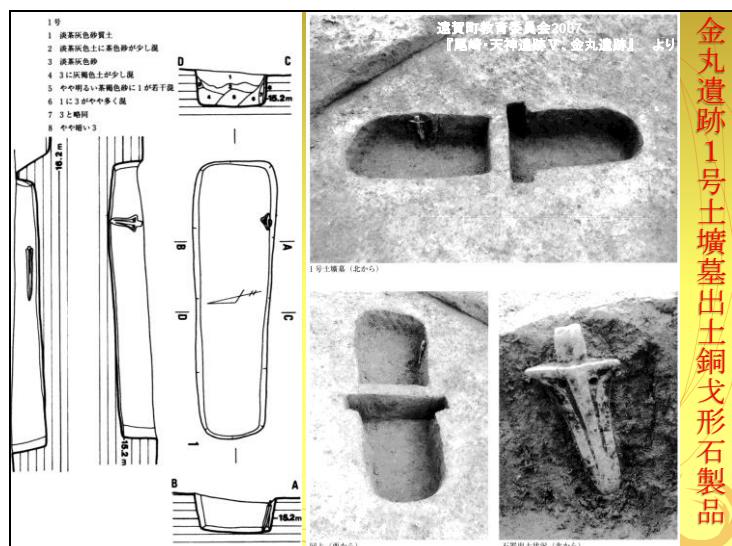
こういうことを見ていきますと、先ほどのムナカタの特徴的なあり方の図を、もう一度改変しなくてはなりません。



結論的には、まず木棺になりますよ。と同時に、銅矛はちょっと位置を下げようかとも思いましたがそのまままで、銅戈をこちらに持ってきて、頭の横まで上げてみました。恐らく銅剣もこういうふうに帶びているのだろうと思いますが、銅戈というのをより高く位置づける、そういう青銅器の価値観というのを、この田熊石畑のムナカタを中心に、古賀、あるいは嘉穂なんかに広がっているのではないかと思います。

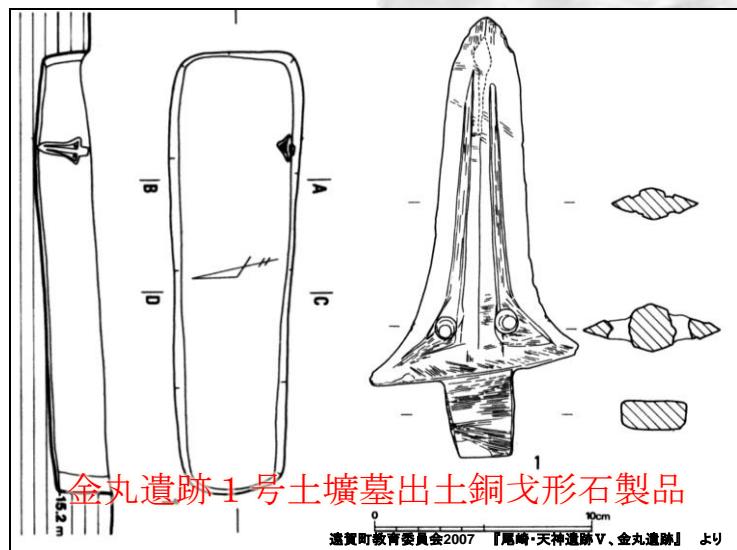
こういった銅戈を重視する世界というのが、中期の早い段階には、このムナカタを中心に、福岡でも東の地域には広がっている。甕棺を使わない地域とも重なって、こういう価値観が創出されていると言えるかと思います。さらに東へ行くと、もうこういうものもなくなって、また大きく変わる。この間のワンクッションとして、ムナカタの独自性というものを強く主張できるのだろうと思います。

こういった人たちは、中四国以東の人たちに青銅器を伝えていく、そういう役割を果たしていたのではないでしょうか。北部九州圏の地域社会が広がる、その延長にはあるのですけれども、独自性を持った青銅器の扱い方をして、かつ、より東の地域との交渉においては青銅器を渡していく。逆に、東から、先ほどありました土器であるとか、あるいは玉類、いろいろなものを東との交易で仲介していた。中枢域から見れば、東の地域への門戸にあたる役割を、このムナカタの人たちは果たしたのではないかと考えられます。



そうした中で、もう1つ触れておかなければならぬのが、次になります。

金丸遺跡で出てきました、銅戈を模倣した、銅戈形の石製品です。



九州では、銅戈の樋をきれいに作り出すなど、銅戈を非常に忠実に模倣した製品というのは、今までほとんどなかったのですけれども、その完形品が、木棺墓と思われる所から出てきております。こういう銅戈をまねたものというのは、九州の中でも東に偏っているというのが、古くから指摘されています。それを裏付けるように、遠賀町金丸遺跡で、こういったものが出てきたわけです。こういう銅戈をまねるという価値観の創出というのは、このムナカタの地域まで共有したものだったろうかと思います。

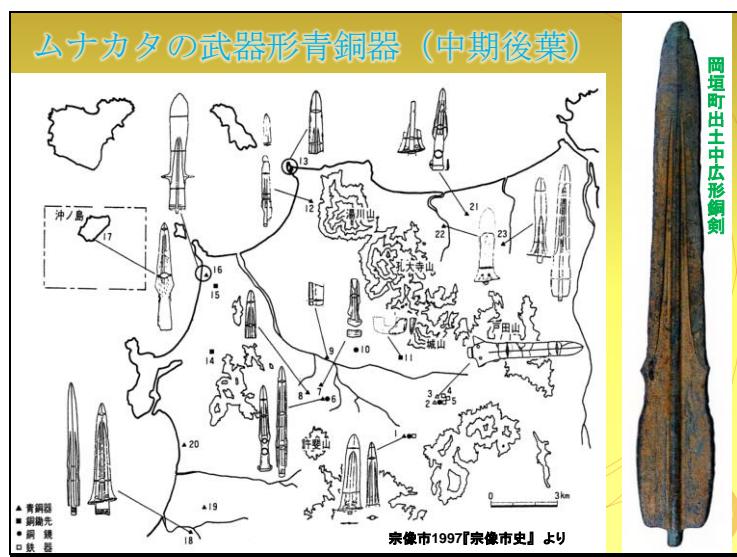


こちらがその写真ですね。こういったものが九州で出るとは正直思っておりませんでした。非常にリアルな銅戈形の石製品です。

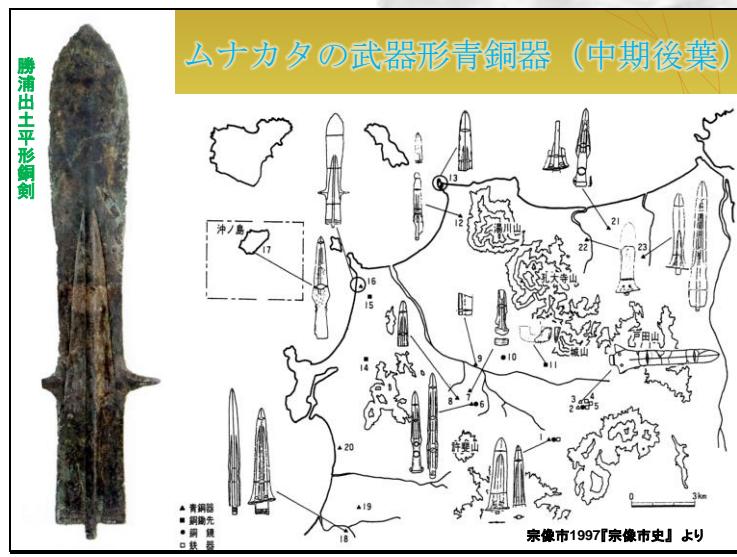


こういったリアルな樋を切ったものはないですけれども、銅戈形模倣品を専属に作っているような工房の跡なども見つかっております。こちらの辻田遺跡でしたかね。やはり、九州でも東に偏った地域で、こういう銅戈形石器製品を作る世界、銅戈そのものにより高い価値付けをする社会というのが、あったんだろうと思います。こういったものを母体に、中期の前半には、このムナカタの地域の青銅器文化が非常に独自性を持っている、そういう時代と言えるかと思います。

では、これがその後どうなっていくのか。取りあえず、次の段階。中期の後半段階になると、該当する青銅器は減ってきます。



隣りの岡垣町で、中広形の銅剣が出てきております。



これは平形銅剣。私などは、松山で作られたものが、はるばるここまで持ち込まれているのではないかと考えています。先ほどの中広形銅剣にしましても、この平形銅剣にしても、より東の青銅器との関係を考えなければならないものです。中期の後半でも、やはり東との関係が、数少ない青銅器から見ることができるのですけれども、その数はこの2点程度で、田熊のような集中的な青銅器は、もう見られなくなっています。

少し言い忘れましたけれども、沖ノ島の銅矛というのも、恐らく、中期の前葉にさかのぼるものでしょう。この田熊なんかの人が行き来する中で、沖ノ島にも行っていたのかなと考えていますが、類例が少ないので、慎重に考えなければいけないところです。海人の動きということで、恐らく後のシンポジウムで、少し話題が出てくるかと思います。

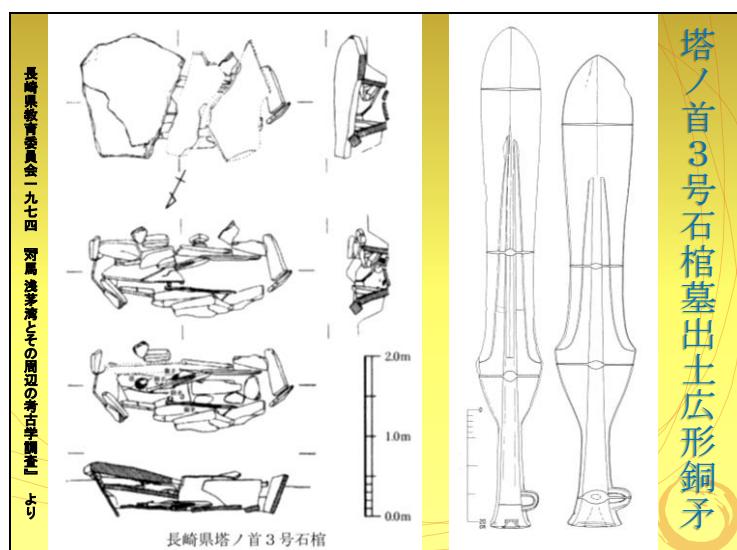


そして、唯一邪馬台国に近い、後期の青銅器として出ているのが、釣川の青銅器で、広形銅戈と言われていますけれども、実は広形の銅矛です。宗像高校で保管・展示されています。後期になると、この地域の武器形青銅器は、非常に希薄です。

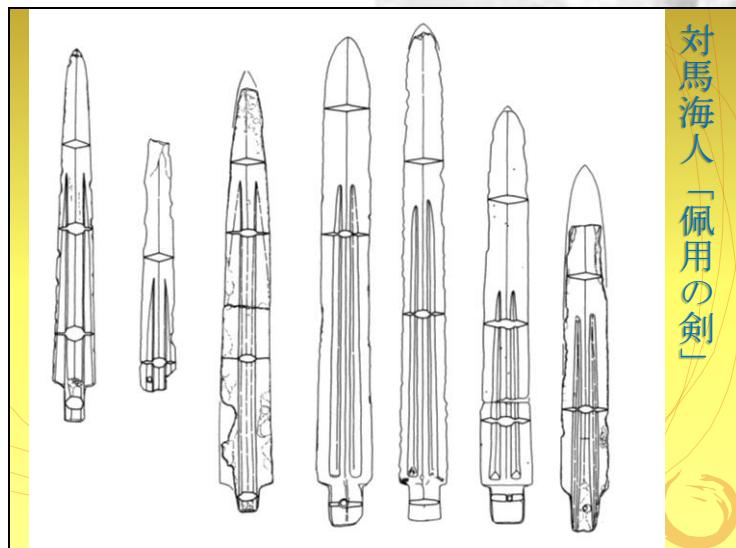


一方では、後期でも、ちゃんと埋納されている青銅器があります。広形銅矛を埋納した、小倉の重留遺跡です。こういったものが、より東の小倉にはあるのですけれども、このムナカタでは、見ることができません。

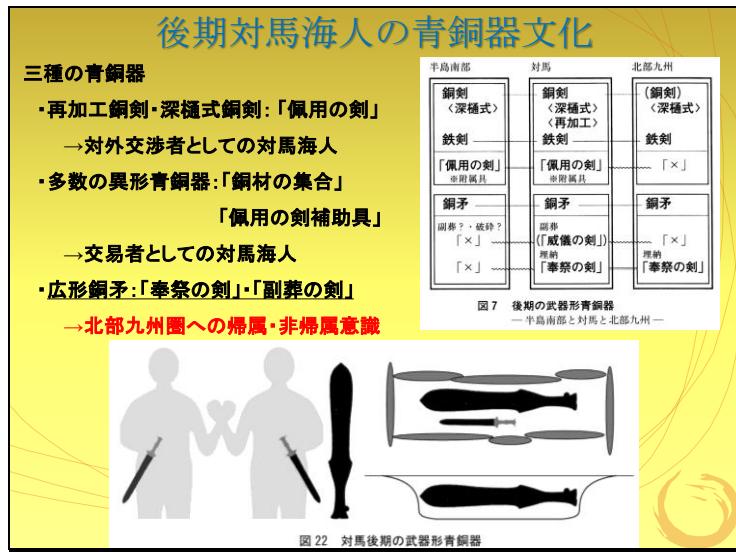
そして、むしろ後期の青銅器について、特に邪馬台国との問題で、ムナカタとの対比で注意しないといけないのが、対馬だろうと思います。



対馬では、後期になってもこういう青銅器を持っていますし、普通なら埋納するのですけれども、石棺の中に入れるようになります。



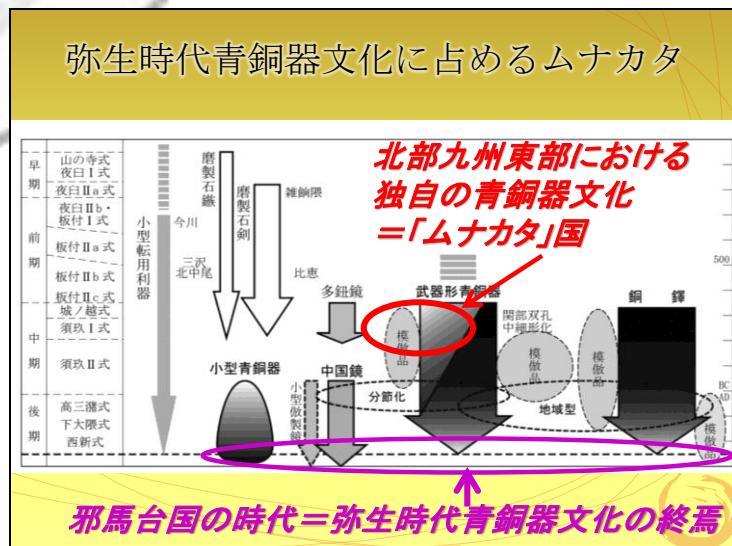
また、対馬では後期になって出てくるこういう深樋式銅剣と共に、特に左のような中期の旧式の銅剣を集めてきて、途中で折り取って、新たに柄を作り出して、身に帯びるようなことをしています。後期に至っても、銅剣を腰に帯びている姿というのを、対馬には見ることができます。



対馬では、こういう形で、後期になつても腰に銅剣を帶びています。恐らく、対外交渉、特に朝鮮半島、狗邪韓国といわれる、金海辺りとの交渉において、交渉者としての身分を表徴するために帶びているのではないか。一方で広形の銅矛も持つし、少し変わった青銅器も銅材として集めるという、非常に特殊な青銅器文化というのを、対馬は見せていました。だから

こそ、『魏志倭人伝』の中で、南北軸の主流ルートとして、対馬が記載された。そこには、こういう対馬の後期青銅器文化というものが大きく反映しているのではと思います。

対馬が元気な後期の段階というのは、残念ながらとなりますが、ムナカタの姿は、対馬ほど見えないなというのが正直なところです。ただ、邪馬台国の時代には、明確に国という形では記載されてないようですが、1つのまとまりを保持しながら、次の沖ノ島の祭祀の母体となった勢力というのは、ずっと温存されていたのではないかと思います。



青銅器の流れ全体を示したものですが、ムナカタはこの位置にあたります。中期の前半。この段階で、北部九州東部で独自の青銅器文化を花開かせたのが、ムナカタ国ではないか、国という名称を与えて、何ら遜色はないのではないかと思います。

ただ、邪馬台国の時代というのは、弥生時代青銅器武器文化が終焉を迎える時代です。弥生時代的な青銅器文化では、いろいろな青銅器というのを各地で作り、使い分けていた。私のところでは平形銅劍であったり、出雲の荒神谷では中細形銅劍であったり、そういういたもので、地域の統合はまだ一歩超えられなかった。青銅器では超えられなかつたものをもう1つ超えたのが、邪馬台国の時代のあり方だと思いますし、そのときには、青銅器文化は終焉していて、直接は語れない。この間に、ムナカタがどういう役割を果たしているのか、あとシンポジウムで触れられればと思います。



最後になりますけれども、銅鐸や武器形青銅器の要素を鏡に統合していくのが邪馬台国時代。そして、それが完成するのは、初期倭王権の時代だろうかと思います。弥生時代の武器形青銅器とか銅鐸というものが花開いていくのは、もう1つ前の、中期の後葉くらいの段階。こういうものから、邪馬台国時代を挟んで変化しながら、初期国家の形成が進んでいったと、私自身は考えております。

邪馬台国の所在地論争など、後段のシンポジウムの際にさせていただければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。